読売 教育ネットワーク

社会はまるごと学校――
すべての大人が先生です

早期医療体験 報告交流フォーラムで、高校生や医大生の質問に答える澤芳樹・大阪大学心臓血管外科教授（9月8日、読売新聞東京本社で／２～６面へ）

巻頭特集 医師志す若者にエール
早期医療体験プログラム 報告交流フォーラム 2～6
「英字紙 こう読もう」中大附属高で出前授業 7
不思議いっぱい 魅力いっぱい 海に学ぶ 8･9
上智大・浦崎茉璃英さんが読売新聞ロンドン支局でインターンシップ 10･11
キャンパス・スコープ制作スタッフが印刷工場を見学 12
リレーエッセー 中国・北京大学「好きなことをするチャンスをつかんで」 13 お知らせ・短信 14

2018.10
Vol.46

早期医療体験プログラム 報告交流フォーラム

医師を目指す高校生が大学病院の救命最前線で学ぶ「早期医療体験プログラム」（特別協賛・日本医師会）の報告交流フォーラムが9月8日、読売新聞東京本社で開かれた。プログラムを経験した高校生と医学生、早期医療体験に関心を持つ高校1年生など約80人が参加、メンター役の心臓血管外科医らと交流した。

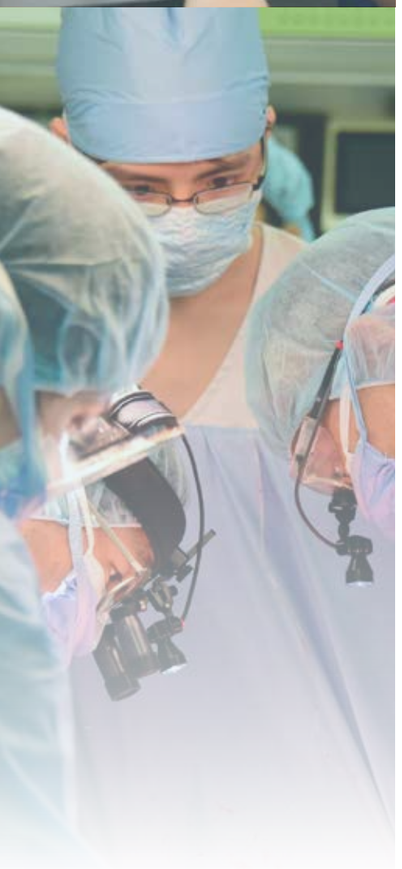
フォーラム冒頭、世界医師会と日本医師会でそれぞれ会長を務める横倉義武医師、高校生を受け入れている天野篤・順天堂医院院長、澤芳樹・大阪大学教授の3医師が講演し、医師を目指す〝次代の担い手〟にエールを送った。

3医師との交流セッションも行われ、地域医療について質問した医学生に対し、横倉会長は「その地域に人がいる限り、医療を提供しなければならない」と話しかけた。

フォーラム後半は懇親会。山高篤行・順天堂大学教授（小児外科）も加わり、小児科医を目指す高校生たちからの質問に応じた。

フォーラムに参加した高校生と医学生たち。横倉会長、天野院長、澤教授、山高教授らを囲んで記念撮影に臨んだ

フォーラム後半は懇親会が行われた。左から①生徒たちを激励する山高教授 ②高校生らに囲まれる天野教授 ③大阪大学病院でメンター役を務めた平将生医師 ④順天堂医院の森田照正医師も駆けつけた



横倉 義武　日本医師会長

良い医師になるきっかけに

「医師になるとはどういうことか」「医師の仕事はどういうものか」。日本を代表する心臓外科医2人が、若い皆さんと話したいと考え、この取り組みができたと聞いています。そこで、日本医師会もぜひバックアップしようと協賛しました。

日本には医師免許を持つ人が32万人。医療に携わる医師は30万人弱で、全国に860近い地域の医師会があります。開業医だけでなく、大学の医師会もある。澤先生は大阪府医師会の副会長、天野先生は順天堂大学の医師会をリードしています。ノーベル賞の山中伸弥先生も医師会の会員です。

医師会の仕事の柱は、地域医療の維持と医師の健康管理。少子高齢化の中、国民の健康と命を守るにはどうすればよいか、政府に意見を述べながら着地点を探しています。皆さんが日本のトップ医師の経験を聞いて、良い医師になるきっかけになればと思っています。

Yoshitake Yokokura

社会保障制度の安定と持続可能性向上を目指し、世界規模の医療課題に取り組む。2018年10月5日まで世界医師会会長を兼任。

天野 篤　順天堂医院院長

医師の視線で現場見てほしい

皆さんの手元にあるプログラムのパンフレットには、「命とは何か、だれのために医師になるのか」とある。すごく良いなと思います。

なぜ高校生の間に、医療体験をしてもらうのか。それは患者としてではなく、医師の視線で医療を体験してもらいたかったから。

医学部の低学年には病院実習がありますが、それは義務であり、受け身です。他の高校生が、遊んだり部活動をしたりしている夏休みに、自らの高い志で医療を体験することこそが大事なのです。

私は「命とは何か」ということを、いつも考えています。私にとって「生きる」とは、自分の周囲の人に対して責任を果たすこと。患者の健康を取り戻す、瀕死の状態から助け出すことです。

医学部に入ること、医者になることはゴールではない。医者としての高い技術と経験で、頼りにしてくれる人の役に立つ時こそ、ゴールだと思います。

Atsushi Amano

心臓を動かしたまま行う冠動脈バイパス手術の第一人者で、天皇陛下の手術も執刀した。これまで手がけた心臓手術は7800件を超える。

澤 芳樹　大阪大医学部教授

自ら受けた以上に社会に還元を

幕末の時代、天然痘やコレラに敢然と立ち向かった医師に、緒方洪庵先生がいます。その緒方先生が大阪に作ったのが、「適塾」という学校で、それが発展してできたのが大阪大学医学部です。

忘れてはいけないのは、洪庵先生の「世のため 人のため 道のため」という言葉。今では、患者の体が弱らない治療はかなり進化しましたが、それでも治らない病気は残っている。そこで、私たちはiPS細胞（多能性幹細胞）を使った再生医療に挑戦しています。

この技術で病気が治ったら、医者冥利かもしれません。しかし、それで患者が死ぬ可能性もある。患者の命を預かって責任を全うするのが、医師の魂であり、根幹の仕事です。

医師は自らが受けた以上に、社会に還元しなければなりません。皆さんが素晴らしい医師になるよう、強く願っています。

Yoshiki Sawa

心臓移植・補助人工心臓植え込み術など最先端治療を主導。iPS細胞を使った心臓病治療に向け、今年度にも世界初となる臨床研究を始める。

早期医療体験プログラム

読売教育ネットワーク参加校の高校生を対象に、医師の心構えを学ぶ場を大学病院が提供する夏休み特別企画。2015年に始まり、参加者は年々増えて計87人となり、体験を糧に医学部に進学したOB・OGも22人にのぼる。

医療現場ではどんな学びがあるのか。2018年と17年の様子を中心にした動画を見ることができます。

交流セッションに参加したのは、プログラムを経験した高校生と医学部に進学したOB・OG大学生、早期医療体験に関心を持つ高校1年生。3グループに分かれて、横倉、天野、澤の3医師が順番にグループを回る形式でディスカッションが行われた。医師を目指す若者たちと3医師のやりとりを紹介する。

※カッコ内は現在の所属、プログラム参加年度と大学名

「AI技術が進歩しても、人間の手による治療はなくなることはない」と力説する天野院長

自分の将来狭めず、欲張ろう　天野 篤 順天堂医院院長

Q プログラムを通じて、患者の立場に立った医療が本当に大事だと感じた。

辻本茉穂（まほ） さん（洛南高2年、18年順天堂大）

天野　色々と感じてくれて良かった。だが、手術で患者の望む結果を残してあげることが大前提だ。患者のケアだけで勝負するのではなく、「何としても治す」という気持ちが大切だ。その上で、患者や家族の不安は、技術だけでは取り除けない。そこでコミュニケーションが必要になることを、忘れないでほしい。

Q 医師として臨床も研究もやりたいと思っている。それは可能だろうか。

本谷嶺奈（もとたにれな） さん（渋谷教育学園幕張高3年、17年順天堂大）

天野　みんな同じ不安を持っているかも知れないが、自分の将来を狭めてはいけない。昔は計算を電卓で行ったが、今はパソコンでもっと早く複雑なことができる。様々なことが進化しており、今できないことも将来は可能になる。もっと欲張りでいい。「自分ならできる」と信じてゴールを定め、実現することだ。

Q 救急医療に関心があるが、大変忙しいと聞く。最近は「医師の働き方改革」の問題もある。救急医療の仕事を世間から批判されることなく行えるのか。

西本大晃（まさあき） さん（灘高3年、17年大阪大）

天野　「できない」と思うと何もできない。試験に例えれば、30分の制限時間で、28分には全員答案を提出する。30分過ぎて、まだ答案を書いているのが許される体制ではダメだ。勤務時間を適正化できる体制が必要で、モデルになる職種はたくさんある。医師の仕事だけでなく、広角に考えることが大切だ。

寄り添う医療、忘れずに　横倉 義武 日本医師会長

「医学部に入ってからも、医師になってからも常に勉強し続ける必要がある。今の志と向上心を忘れないでほしい」と参加者に熱く語る横倉会長

Q 心臓移植の現場に立ち会う経験を通し、臓器提供者とその家族について考えた。患者に寄り添い、1人でも多くの命を救うことに加え、命について考え続ける医師になりたいと思うようになった。

西村一真 さん（東大寺学園高3年、17年大阪大）

横倉　素晴らしいことだ。患者に寄り添うというのは、言うのは簡単だが、なかなか難しい。患者のために常に努力すれば、その気持ちは必ず伝わる。寄り添う医療を忘れないでほしい。

Q これまで医師をしていて、良かったと思ったことは何か。

杉町美佳 さん（大阪府立茨木高3年、17年大阪大）

横倉　やはり、1人の患者の命を助けられたと実感した時だ。しかし、そうならず、つらかったことの方が多い。

Q 将来は海外で働きたいが、日本の税金で育てられた医師が海外に行くことは、日本国民の期待に反するのではという葛藤がある。

水橋優介 さん（島根大医学部2年、15年順天堂大）

横倉　あなたが海外でがんばれば、その地で日本が尊敬される国になる。そういう貢献の仕方もある。自分が置かれた立場で、自分がやりたいことを目指して、しっかりやればよい。

Q 外科医は手術というイメージが強かったが、患者や家族の人生を背負う仕事だと分かった。移植を待つ子の母親らから話を聞き、患者と信頼関係を築くことがいかに大切か学んだ。

筋師万由子（すじし） さん（神戸女学院高等学部2年、18年大阪大）

澤　医者には患者とハートフルに接し、熱い心で懸命に助けたいという気持ちが欠かせない。一方、プロとしてミッションを達成するには、クールに割り切る部分も併せ持つ必要がある。医者の仕事はボランティア。患者への責任をどう全うするかという思いを持ち、セルフコントロールできる人でないと、人を助ける医者にはなれない。

サイエンス×外科医でアカデミック・サージャンになろう―。次代の担い手を激励する澤教授

ハートフルでクールな医師に　澤 芳樹 大阪大医学部教授

Q 臨床と研究を、どう選択すべきだろうか。

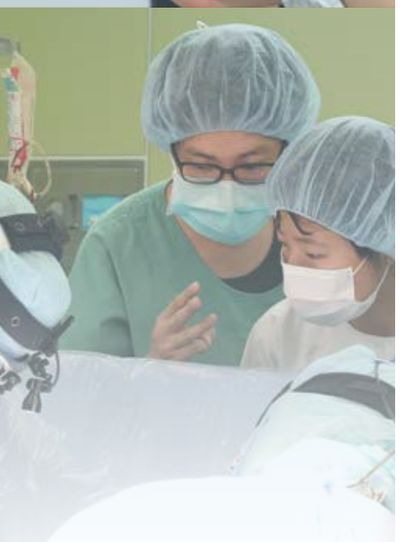
城内薫乃（きうちゆきの） さん（南山高女子部3年、17年順天堂大）

澤　いきなり基礎研究から入ると、医療現場の課題が分からない。手術で助からない患者がいて、悔しい思いをすると、何とかしようという気持ちが湧く。その後に基礎研究をすると、サイエンスを身につけて考え方が1ランクアップし、臨床能力も上がる。心臓外科医は「アカデミック・サージャン（研究志向のある外科医）」でなければならない。専門医ぐらいに進んでから、基礎研究をするのがいいのではないか。

Q 移植医療には臓器提供者（ドナー）が不可欠だが、移植医療の将来性をどう考えるか。

小林博也 さん（開智高3年、17年大阪大）

澤　移植希望者に対してドナーが足りないが、劇的に増やすには日本の社会構造を変えないといけない。すると、iPS細胞などを使う「再生医療」の考えが出てくる。移植医療を進める傍ら、再生医療もやっていたら、逆転する日が来るかもしれない。



参加した高校1年生の感想

川久保彩 さん　（浦和明の星女子高）

憧れだけで医師を目指して良いのかという葛藤がある。自分の目で医療の現場を見て、命を預かる覚悟が本当にあるのかを確認したいと強く思った。「患者さんはパソコンではなく、人だ。患者さんを見て、話を聞いて、話しにくそうならば、それを察して聞き出す力が必要」という横倉会長の言葉が心に残った。

浅岡秀輔 さん　（海陽中等教育学校）

医師に対する職業観が大きく変わった。一つのミスで患者が亡くなるリスクがあり、知識はもちろん、高度な教養や倫理観も求められる。軽々しい気持ちでなってはいけない仕事だと分かった。でも、覚悟をもって臨めば、大きなやりがいがあるということも伝わってきた。医師になりたいという思いが強くなった。

茂田美々莉 さん　（湘南白百合学園高）

過去に早期医療体験に参加した先輩たちは、キラキラと輝いて見えた。志の高さは先輩たちに追いつけていないかもしれない。でも、人を助けられる存在になるため、今は勉強に励みたい。

医療現場ではどんな学びがあるのか。2018年と17年の様子を中心にした動画を見ることができます。

第一期生も愛媛から参加

医学部の学生にとって、人体の構造を学ぶ解剖実習は特別な意味を持つ。医師への第一歩ともいえるこの実習を、4月から3か月間受けた愛媛大学医学部2年の冨田瑞葉さん（20）は、早期医療体験の第1期生。愛媛からフォーラムに参加した冨田さんに話を聞いた。

松山市の中心から電車で約30分。松山平野の南東部に、愛媛大学医学部・重信キャンパスはある。4月中旬、その一角にある実習室で冨田さんは目を閉じ、祈りをささげた。解剖台の献体にメスを入れる前の黙とうだ。

解剖実習は、2年生から始まる基礎医学系科目の柱の一つ。7月中旬まで続いた実習を振り返り、「献体という尊い遺志を受けとめられるのか、最初は不安と重圧で必死。でも、日に日に強まったのは、医師は生と死に向き合う仕事だという自覚でした」。かみしめるように語り始めた。

ツンと鼻を突くホルマリンの臭いには慣れたが、メスに込める力加減は難しく、指先の感覚を研ぎ澄ませた。筋肉、神経、血管、そして様々な器官。人体の構造と機能は思った以上に複雑で、そこに〝個性〟を感じたという。

口頭試問も毎週のように行われた。「この神経は、どの筋肉を支配しているのか？」。特に献体を前にした指導教員との試問は一つでも誤れば不合格、やり直しとなる。午後11時近くまで居残りとなる日もあり、「そんな夜は自炊する気力もない。部屋に戻ってバタンキューです」。

目当ての神経がなかなか見つからず、組織を傷つけてしまったこともある。「実際の手術では時間はかけられず、失敗は許されない」。外科医に求められる責任の重さを、ひしひしと感じた。

背中押してくれた早期医療体験

外科手術を初めて間近で目にしたのは2015年8月、順天堂医院での早期医療体験だった。心臓を動かしたまま行う冠動脈バイパス手術を、執刀する天野教授の肩越しに見学して、拍動する心臓に目を奪われた記憶は今でも色あせない。

「身近に医師がいなくて、どんな仕事か肌で感じたくてプログラムに参加しました。でも、初日は全てに圧倒されてしまい、私には無理かもしれないとも思いました」

揺らぐ心を前に向かせたのは、術後の患者の回復ぶりだった。翌日には立って歩き、携帯電話で話す患者の様子に驚いた。一方で、集中治療室から出られない人も目の当たりにした。「医療の多様な側面を垣間見て、それでも医師になりたいと思えた。私の背中を押してくれたのが早期医療体験です」

地方医療の現実知り学びに

神奈川県横浜市育ち。都心の中高一貫校に通い、バトントワリングに夢中だった都会っ子が、親元を離れて、生化学や細胞学などの基礎医学に没頭した。そして、今回の実習が教えてくれたことが二つあるという。

一つは、がん化が進み、骨と癒着して硬くなった病変に実際に手を触れて学んだ触診の大切さ。もう一つは、かかりつけ医もいない過疎地では、この触診の機会が失われ、手遅れになるケースがあるという懸念だ。

「医師の定住が進まない愛媛の一部地域の現状を学び、切実な問題と受けとめられた。都会の大学では気づけませんでした」

フォーラムではその学びから、地域医療の将来を横倉会長に質問した。「町に医師がいないと人が住めなくなってしまう。そこに人がいる限り、医療を提供しなければならない」という会長の言葉が、強く心に残った。

目標は外科医だが、出産・子育てとの両立は大変という周囲の声も気になっていた。だが、「男も女も関係ない。やる気の問題だ」と語る澤教授は頼もしく、嬉しかった。

「もし今、僕が医学生だったら、アメリカで研修を受ける。自分の選択肢を狭めちゃだめだよ」――。解剖実習を終えて感じていた将来への焦りは、天野教授のアドバイスですーっと薄れた。

これから薬理学、免疫学、遺伝学と専門教育はさらに深くなる。献体は納棺し、11月1日に慰霊祭と返骨式が行われた。再び目を閉じ、手を合わせた冨田さん。「命と向き合う重みを学ばせてもらいました。家族のもとで安らかに眠ってください」。静かに感謝の気持ちを伝えた。

2015年8月、天野教授の手術を見学する冨田さん（右）。「今ならば、別の視点で手術を見ることができる」と早期医療体験を振り返った。

「医療のために協力してくださった患者さんには感謝の気持ちしかありません」と語る冨田さん。

英字紙 こう読もう

中大附属高で出前授業

読売新聞東京本社英字新聞部の平山綾子記者（41）が10月25日、東京都小金井市の中央大学附属高等学校で「英字新聞の読み方」を教える出前授業を行った。受講したのは、英語で専門科目を学ぶ中央大学国際経営学部（来春新設）や他大学への進学を目指す3年生26人。「英字新聞を読むきっかけを作ってほしい」と同校進路指導部から依頼があり、授業が実現した。

The Japan Newsを手に、見出しのルールを解説する平山記者

Pop Quizに挑戦する生徒たち

英字新聞を初めて手にした生徒たち。取材と編集にまつわる苦労話に思わず笑顔がこぼれた

きっかけは英語の歌詞

英字新聞部は読売新聞の英字紙「The Japan News」を編集している。

授業のはじめに平山記者が披露したのは英語が得意科目になった自身のエピソードだ。「中学時代に米国のアイドルグループ『ニュー・キッズ・オン・ザ・ブロック』のファンになり、歌詞を写経のように写していたら自然と英語の成績が上がった」。マイクを手にグループのヒット曲を口ずさむと、生徒たちの顔に笑みがこぼれた。

自身の米国留学や現在の仕事を説明し、教室の関心をぐっと引き寄せてからアドバイスしたのは、英字新聞の全てを読もうとしないこと。「まず、見出しと記事の最初の段落、リード文を読むようにしてください。ニュースの概略が分かります」と話しはじめた。

この日の「The Japan News」と、冊子「Japan News早わかりガイド」を手に、英字新聞独特の見出しルールをテンポ良く解説する。過去に起きたことは現在形の動詞を使い、ニュースの生々しさや切迫感を伝えること、未来を表すには「to＋動詞の原形」を用いること。解放されたジャーナリスト安田純平さんの見出し Journalist Yasuda freed 3 yrs after being kidnapped in Syria を例に、be動詞のwasが省略されている点を指摘すると、「本当だ」という声があがった。

見出しの単語の意味は?

授業の後半はPop Quiz（抜き打ちテスト）。見出しによく使われる単語の意味を４人１組で考えるグループワークだ。

Eyeは「検討する」、nameは「指名や任命する」。動詞として使われる名詞が多くあることを次々と学んでいくが、生徒たちが手こずったのは Upper house OK's abdication bill という見出しの翻訳だ。

「abdicationが分からない」

「billって何だっけ?」

各グループを回りながら平山記者は「もうすぐ平成時代が終わる。天皇陛下はどうしますか?」とヒントを出していく。

「参議院が退位法案を承認」と正解にたどりつくグループもあれば、Upper Houseを「上院」と訳す生徒も。そんな解答に対して、「上院はアメリカね。日本では参議院です」と鋭く突っ込みを入れる平山記者。教室のあちこちで英語が飛び交い、笑い声が響いた。

英字紙は生きた教材

授業後、朝倉南さん（18）は「初めて英字新聞を手にしたけれど、意外と読めるところがあった。これは英語の勉強になると思った」、岩尾美来さん（17）は「一つの記事に色々な単語が詰まっている。読めば知識が広がる気がした」と感想を語った。

同校進路指導部の森田太郎教諭（52）も「高校生が英字新聞を手にする機会は少ないが、これからの時代、読めないと困るはずだ。生徒たちの反応を見て英字新聞は〝生きた教材〟だと思った」と話した。

Pop Quiz

Headlineによく使われる単語です。訳してみましょう！

① **eye**……Ikea eyes new stores in Tokyo, Osaka
② **body**……Gymnastics body to look into harassment scandal
③ **ink**……Tennis star Osaka inks endorsement deal with Nissan
④ **back**……Koizumi backs Ishiba in LDP presidential race
⑤ **summit**……Trump, Kim hold historic summit talks

The Japan News by The Yomiuri Shimbun　http://the-japan-news.com/

不思議いっぱい　魅力いっぱい

海に学ぶ

「横浜・八景島シーパラダイス」（横浜市金沢区）が開催している「シーパラこども海育塾」。海の不思議と魅力を親子で学ぶ教室が、月に1回のペースで開かれている。子どもたちは、海に何を見出し、何を感じ取っているのか。学びの現場からリポートする。

文・写真 ● 教育ネットワーク事務局専門委員　秋山哲也

1 「ブルーカーボン」って？

「なになに？」。小学生たちの目が一斉に1枚の写真に注がれた。写っていたのは海底から突き出た棒。その最上部には何匹ものカニがうごめいている。もう1枚は、横浜市中区にある山下公園。貨客船「氷川丸」が係留されるなど、のんびりした景色が広がるが、その海面は赤茶色に変色している。赤潮だ。

「この海では夏場に海水温が上昇すると、こんなことが起きてしまいます」。こう話すのは、横浜市温暖化対策統括本部係長の吉田美緒さん。赤潮は生活排水などが海に流れ込み、動・植物プランクトンが異常繁殖して発生する。その結果、海中の酸素も消費されてしまう。カニたちは地獄の底からなんとか離れようと、海中を上へと移動しているのだ。

6月の海育塾初日、八景島シーパラダイスに集まった約50人の親子を前に、吉田さんが解説する。「赤潮だけでなく、地球温暖化も身近な場所に影響を及ぼしています。（温室効果ガスの）二酸化炭素をなるべく出さず、吸ってくれるものを増やさなければいけません」。

横浜地方気象台の観測によると、横浜市の2005年の年間平均気温は1905年と比べ、1・8度も上昇した。

「温暖化対策にも役立つものとして陸上では森林などが知られていますが、海洋にも海藻があります」

森林などが二酸化炭素を吸収して地球温暖化防止に寄与することを「グリーンカーボン」と呼ぶ。これに対し、海の生態系が吸収・固定（貯蔵）するのが「ブルーカーボン」。海の役割にもっと注目してほしいと、2009年に国連環境計画が命名した。地球表面の7割を占める海は陸上以上に気候を左右する存在なのだ。

吉田さんは「光合成をして二酸化炭素を吸収・固定する重要な場所、ブルーカーボンに注目しましょう」と子どもたちに語りかけた。

入塾式では、塾長を務めるシーパラダイス運営会社「横浜八景島」の布留川信行社長（68）が「東日本大震災など、恵みの海が脅威となることはあるが、それを乗り越えて海について学び、成長してほしい」と激励を送った。

貧酸素の海底から、忌避するカニ（2000年5月撮影）＝横浜市温暖化対策統括本部提供

横浜市中区の山下公園前で見られた赤潮（2009年8月、横浜市の石井彰さん撮影）

布留川信行塾長

吉田美緒さん

海洋生物とふれあい

この日は、あいにくの雨にもかかわらず、塾生たちの歓声が繰り返しわき上がった。屋外施設の「ふれあいラグーン」で、海洋生物の飼育体験に挑戦できたからだ。

塾生たちは、給餌穴から小さな手を伸ばすコツメカワウソや体重460kgのセイウチに、おっかなびっくり魚を与えた。学芸員で飼育技師の萬倫一さん（34）は、「風雨の中でも動物たちへの給餌は欠かせません」と、地味ながら重要な仕事だと強調した。

中でも大好評だったのは、シロイルカの「クルル」と「パララ」との触れ合いタイム。

「シロイルカさんは僕のサイン通りに後ずさりしながら拍手をしてくれたよ」。横浜市の小学2年生、坪江爽佑君（7）が手を挙げて塾生たちの前で報告した。

爽佑君は後日、打ち明けた。「イルカがジャンプする動きをまねたくて、高飛び込み教室に通っているんだ」。イルカに触発されたのだった。

（上）穴から手をのばして塾生に餌をねだるコツメカワウソ
（下）雨の中、飼育体験をする塾生たち。シロイルカは最後に、「サヨナラ」とあいさつしてくれた

2 生態系保全へ研究続く

2回目の海育塾は7月、「港湾空港技術研究所」（神奈川県横須賀市）が教室で、子どもたちは、濁った海水をアサリやムール貝で浄化する実験などを見学した。

ここでは「海」をキーワードに生態系、津波、人工構造物などを幅広く研究している。しゅんせつ土砂や製鉄などで発生する副産物を使って海洋生態系の保全・再生が可能かどうか調べるのも重要なテーマだ。横浜市の山下公園前やベイサイドマリーナ周辺の海域でも、しゅんせつ土砂などを利用した実証実験が行われ、自然再生が図られている。

2015年からは、浅い海の生態系が大気中の二酸化炭素をどのくらいの速さで取り込んでいるかを地球全体で数値化（推計）する研究に世界で初めて取り組んでいる。

講師を務めた沿岸環境グループ長の桑江朝比呂さん（47）は力を込める。「海が取り込む二酸化炭素は森林以上とみられます。海洋の力を漠然とではなく、具体的な数値や金額換算で伝えることが、持続可能な社会の実現を目指す上で重要なんです」

津波の怖さを体験

タッチプールでカニを手にとる

海中工事 ロボが手助け

研究所は、海の中で働くロボットの開発も手がけている。子どもたちに紹介されたのはショベルカー型。「遠隔操作する水中建設機械を目指しています」と研究員が説明する。スキューバ潜水による作業では、水圧の影響で窒素が血液中に溶け込みやすくなり、麻酔されたように方向感覚を失うこともある。ロボット開発は潜水士の安全面から、その役割の一部を担わせるのが目的だ。

水を注入し高水圧の深海を水槽に再現。カップ麺の容器はみるみるうちに小さくなった

しんかい6500が相模湾の深海でとらえたイバラヒゲ（海洋研究開発機構提供）

シーパラこども海育塾

「横浜・八景島シーパラダイス」が2015年度に社会貢献事業として始め、横浜市や周辺の研究機関、大学、漁業協同組合などの協力で運営されている。2018年度は6月から19年3月まで全10回。親子で海の生きものを観察し、海洋環境などについて専門家などから学ぶ。後援・横浜市温暖化対策統括本部、読売新聞東京本社

3 深海調査 敵は水圧

海は水深200mより深い部分が全体の92%を占め、光がほとんど届かず光合成はできない。宇宙より未知の部分が多いともいわれるが、こうした場所で生命の謎を解き明かしてきたのが、横須賀市内にある「海洋研究開発機構」（JAMSTEC）だ。

8月の3回目の授業はここが舞台。パイロットとして潜水調査船に318回も搭乗した田代省三さん（61）が体験談を語り始めた。

「最大潜航深度の6500mまで潜ると、1平方㎝の面積に軽トラック1台分（680kg・約680気圧）もの水圧がかかる。人が乗り込む『球っころ』（耐圧殻）はチタン合金製で直径が2mあるが、それが5㎜も縮んでしまうほどです」

横浜市の小学3年、田村尚寛君（9）は「観察窓になぜガラスが使われてないんですか」と質問した。厚さが約14㎝ある観察窓はアクリル樹脂製で、水族館の水槽にも使われている。田代さんが「硬さと柔軟性を兼ね備えている」と答えると、尚寛君は大きくうなずいていた。

忠実に再現された有人潜水調査船「しんかい6500」の耐圧殻模型に入り、居住を体験する子どもたち

「しんかい6500」の各部について説明する田代さん

海外での取材を体験

読売新聞ロンドン支局でインターンシップ

上智大国際教養学部・浦崎茉璃英（まりえ）さんが報告

読売新聞教育ネットワーク事務局を窓口とした上智大学生の読売新聞海外支局インターンシップが2018年夏に実施され、国際教養学部国際教養学科2年（当時）の浦崎茉璃英さんが8月下旬から3週間、読売新聞欧州総局ロンドン支局で就業体験をしました。浦崎さんの報告（抜粋）です。

取材同行で訪れたマルクスの墓の前で

様々な人々と関係築きたい

メディア業界に興味を持ったきっかけは、大学の海外短期研修で英国オックスフォード大学に2週間ほど留学した際、ジャーナリズムや風刺（Satire）などメディアについて学んだことです。様々な文化のもとで育った多様な性格及び価値観を持った人々と関係を築き、彼らの役に立てる仕事をしたいとも考えており、記者という仕事を実際に学ぶ絶好の機会と思いインターンに参加しました。

読売新聞東京本社で行われるインターンシップ「読売アカデミー」で読売新聞グループ全体の概要について学び、東京本社国際部で記事の編集を中心に新聞制作の過程を2日間にわたって実習したうえで、渡英しました。

ロンドン支局は、緒方賢一欧州総局長以下駐在特派員4人体制で、英国のほか北欧諸国のニュースもカバーしています。

実習内容はとても充実しており、毎日とても新鮮でした。ニュースの事実確認や記事作成に必要な情報収集、インタビュー取材への同行、議会や英国公文書館の見学、イベント等の取材及び記事の作成、「飾り」と呼ばれる記事に関連する年表や図などの作成、パリ支局訪問と仏外務大臣による記者会見の見学など盛りだくさんでした。

支局オフィスで

支局入口で

カズオ・イシグロ氏に取材

最も印象に残った仕事は取材です。マスコミ向けの内覧会（プレスプレビュー）と記者会見でのぶら下がり取材、インタビューの3種類の取材を体験しました。

一つ目のプレスプレビューは、日本外務省の対外発信拠点のひとつ「ジャパン・ハウス　ロンドン」が主催した新潟県燕三条の金属加工を紹介する展示会の取材です。まず、取材に先立って支局で一眼レフの基本的な操作と写真を撮る際のポイントを駐在特派員から教わりました。ジャパン・ハウスでは企画局長や職人の方々の話を聞いたり展示会の写真を撮ったりするなど、他社の記者に交じって取材をしました。

取材後は、支局に戻り、会場風景などの写真から数点を選び見出しを付けた後、展示会についての記事執筆に挑戦しました。総局長の指示で何度か書き直したうえで、東京の国際部に送稿。読売新聞新潟県版で紙面化できました。

二つ目の記者会見は取材助手として駐在特派員に同行したもので、日本大使公邸で行われたノーベル賞作家カズオ・イシグロ氏への旭日重光章叙勲伝達式の取材でした。一人の人を各社の記者が囲んで質問する取材です。テレビ局も取材で来ていたので、新聞社とテレビ局の取材の仕方や雰囲気が興味深く感じられました。取材では、私もイシグロ氏に直接質問をする機会があり、大変貴重な経験でした。その際、緊張のあまり質問を理想通りの言い回しで聞けず、自分が聞きたかった内容とは少し違った回答が返ってきた時はとても悔しい思いをしましたが、海外で英語を使って仕事をすることの難しさや大変さを直に体験できたことは、大きな収穫となりました。発言の重要な部分を和訳したものが、翌日の紙面に掲載された記事に反映されており、達成感を感じました。

三つ目の取材は、緒方総局長に同行したノーベル平和賞受賞者シリン・エバディ氏へのインタビューでした。緒方総局長とエバディ氏とはロンドン赴任前からの知り合いだったとのことで、質疑応答の経験や取材相手への配慮ばかりでなく、記者にとって人間関係がいかに大切かを学びました。最後にエバディ氏から直筆のサインと記念写真も撮っていただき、光栄でした。

緒方さんに同行したエバディ氏のインタビュー

日本人に必要な情報かを判断

インターンでは、とても多くのことを学びました。

まず、海外特派員の仕事の大変さです。皆さん、とても忙しく、常にだれかが出張しており、全員が支局に顔をそろえることはありませんでした。また、比較的時間にゆとりがあれば、いろいろな体験談を聞かせてくれましたが、大事なニュースが入れば一瞬で予定も変わりました。

さらに、日本の読者を念頭に置いて伝えるべきニュースかどうかの判断を常に迫られていることの大変さも、間近で感じることができました。毎日、BBCで見るニュースや英国の新聞に大きく取り上げられているニュースでも、日本にいる読者にとってどの程度重要なものかを考えながら記事を作成することが必要で、膨大な国際ニュースをいかに簡潔にわかりやすく伝えるかに記者は日々腐心しているとのことでした。

他にも、海外駐在にともなうリスクについての話も印象的でした。緒方総局長はモスクワやテヘランに駐在した際に盗聴や家宅捜索などを経験したとのことで、メディアで働くことの大変さも学びました。

今回のインターンを通じて、これまでいかに新聞を読んでおらず、時事問題や新聞に関する基礎知識が欠けているか、自分の勉強不足を思い知らされました。

業務時間中でも時間外でも記者の皆さんはフレンドリーで話しやすかったのが印象的でした。取材のプロなので、話し上手かつ聞き上手で、最初は皆さんのお話を聞いていたのに、気づいたらつい自分がしゃべっていたということも度々でした。

今回の経験を、今後の進路決定などに生かしていきたいと考えています。

支局のみなさんとの懇談会

キャンパス・スコープ 42号

制作スタッフの大学生が印刷工場を見学

リポート●菅沼咲永（42号メンバー・昭和女子大1年）

刷り上ったばかりの「キャンパス・スコープ」を手にする大学生の制作スタッフ（9月26日、読売新聞東京北工場で）

輪転機の迫力に驚き

大学生20人以上が制作に参加

大学生と読売新聞が作る学生新聞「キャンパス・スコープ」の42号が10月1日、発行された。1998年の創刊で、タブロイド版20ページの42号は10万部を印刷。学生新聞では最大級の規模とされ、制作には20人以上の大学生が参加した。代表の木村隆之さん（早大3年）は1年生の秋からメンバーに加わり、「仲間と紙面を作り上げるのが面白くて、気付いたら制作にたずさわって2年になっていました」という。

フロントページには女優の今田美桜さん（21）が秋の装いで登場。見開きページを使った企画は「五輪がつなぐ東京の歩み」と題して、1964年の前回の五輪当時と現在の様子を比較し、街の移り変わりや住民の思いをルポした。

広告も学生が営業や制作を担当し、総務省の広告ページでは、政治とのかかわりや男女共同参画のあり方について、坂東真理子・昭和女子大学総長の意見を聞いた。

白い紙が新聞に

42号は9月26日、読売新聞東京北工場（東京都北区）で印刷された。制作メンバーのひとりである私（菅沼）も現場に立ち会うことができた。

キャンパス・スコープの印刷の前に、読売新聞夕刊の印刷を見学した。新聞の印刷過程を見るのは初めてだったが、その迫力に驚いた。輪転機の中で、白い紙が徐々に印刷された新聞に変わっていき、それがスピードを上げて大量に頭上を流れていく。工場のスタッフの方々はカラー刷りの色の調整をてきぱきと行っていて、緊迫感があった。

印刷し終えた新聞は、販売店に送り届ける部数ごとに梱包。トラックに積み込まれるまでほとんどの工程を自動で行っていて、その精度の高さにもびっくりした。

配合変えて何度も色調整

その後、キャンパス・スコープの印刷に立ち会った。自分たちの手で制作したキャンパス・スコープが、輪転機を使って目の前で大量に印刷されていく様子に感動した。私は色の調整に携わった。工場のスタッフの方は、私たちのリクエストに応じて何度も色の配合を変えて、丁寧に色見本に合わせてくださり、納得のいく仕上がりになった。できあがった紙面は、部員が半年間地道に準備を重ねてきたものであり、実物を手に取ると感慨深いものがあった。早くたくさんの人に見ていただきたいと思った。

大学生のうちに新聞の印刷に立ち会うことは、なかなかできない経験である。そんな貴重な機会を得ることができて幸せだった。

＼42号差し上げます！／

希望者は次の①～③を同封し郵送ください。
①郵便番号、住所、氏名を書いた紙片
（封筒に貼り宛先にします）
②氏名と電話番号を書いた紙片
③140円分の切手
■宛先
〒100・8055（住所不要）
読売新聞教育ネットワーク事務局
「キャンパス・スコープ係」
■問い合わせ
同事務局　☎03・3217・1967

1人1部限定

海外で学ぶ・リレーエッセー㊻

中国・北京大学
「好きなことをするチャンスをつかんで」

四天王寺高（大阪府）卒、北京大学（中国）1年（執筆時）
翁 雨音（おきな あまね）さん

北京大学のテレビスタジオで、大山（ダーシャン）（右から3人目）、チームのメンバーたちと翁さん（左から2人目）＝本人提供

私の北京大学（PKU）での最初の1年は大学にとっても特別な年だった。2018年5月4日は北京大学の創立120周年記念日だったのだ。それまでの2か月間にわたって私が参加していた多くの関連イベントの中で、最良の一つをご紹介したい。

この学期の間、私はPKUの留学生OB、OGたちにインタビューする、シリーズもののテレビ番組の制作に関わってきた。私たちのグループのゲストは中国で人気のカナダ人コメディアン大山（ダーシャン）、本名マーク・ロズウェルさんだった。質問づくりからビデオの編集、中国語、英語の字幕の作成まで講義の合間を縫って多くの時間を費やした。できた番組はPKUTVという大学内テレビ局で放映されることになっていた。

私はメディア学専攻で、このプロジェクトは私がやりたいことだったが、それは授業とも、テレビ局の普段の作業とも違うものだった。「大学の名前を冠して放映するのだから、一つのミスも認められない」。この教授の言葉が、プロとして要求されていることを思い起こさせた。何度も何度も詳細にわたる微妙な修正をした上で、われわれが作成した番組が放映された。「これでCCTV（中国の国営放送『中国中央テレビ』の略称）の水準になったよね」とお互いジョークで言い合っていたが、まさかそのCCTV（リューシン）の（著名なプレゼンター）劉欣さんがわれわれの番組を「秀逸」と褒めてくれるとは思ってもみなかった。

私は日本生まれ、日本育ちだ。過去に中国に住んだ経験のない留学生の私が中国でのメディア文化、コミュニケーションのとり方を理解するのは容易ではなかった。「大学に入ったら自分は平凡な人間だと感じるかもしれない。だからこそやりたいことをやりなさい」。先輩が入学式後、こんな言葉をかけてくれた。そして、そのように1年目をすごせたことに喜びを感じている。勉学のうえで優秀な学生でいること以外に、様々な活動、組織の中で自分の居場所を見つけたいといつも思っている。PKUTVのほか、PKUラジオや、学部の生徒会に参加した。こうした活動を通して、より実際的な経験を積むことができ、友達とも交流を深めることができるのだ。

（会報編集部抄訳 The Japan News 2018年6月28日）

北京大学

1898年創立の中国最高峰の国家重点大学で政財界や文学界に多くの優れた人材を輩出している。卒業生には李克強現首相ら。

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイトへ。 http://ryu-fellow.org

英語の原文はhttp://the-japan-news.com/news/article/0004459598でお読みいただけます。

11月17日（土）

13：00～16：00（12：30開場）

大学の実力フォーラム

読売新聞東京本社は、（株）内田洋行と共催で、東京・大阪・福岡の教室をICT（情報通信技術）で結んで「未来の学び・進路選択」を考えるフォーラムを開きます。教材は全国692大学の最新情報を掲載した『大学の実力2019』。ICT機器を使った「未来の教室」で学ぶ楽しさを体験してみませんか。

未来の教室で高大接続を考える

会場 内田洋行・ユビキタス協創広場CANVAS

3会場をICTで接続!

東京 定員 100人
東京都中央区新川2-4-7
内田洋行本社ビル

大阪 定員 40人
大阪市中央区和泉町2-2-2
内田洋行大阪支店

福岡 定員 40人
福岡市中央区大名2-9-27
赤坂センタービル 内田洋行九州支店

■ 開会あいさつ
大久保昇・内田洋行代表取締役社長

■ 基調講演・質疑応答
「高大接続改革が問うもの（仮）」
安西祐一郎・元慶応義塾長

■ ワークショップ
「偏差値だけで決めていいの?」
松本美奈（読売新聞専門委員）
【東京】飯塚秀彦（群馬県立大間々高校教諭）
【大阪】倉部史記（進路指導アドバイザー）
【福岡】下田浩一（福岡県立城南高校教諭）

安西祐一郎氏
（元慶応義塾長）

大学の実力2019
中央公論新社、1,782円（税込み）

■定　員　先着100人
■参加料　1500円（『大学の実力2019』をプレゼント）。親子2人の参加は1人分で可。
■期　限　11月12日（月）　※定員に達し次第、締め切ることがあります。
■問合せ　読売新聞「大学の実力」調査担当　daigaku2014@yomiuri.com
■詳　細　http://kyoiku.yomiuri.co.jp/event/boshu/contents/1117.php

応募はこちらから→